

Title	おらんだ正月(森銚三著, 富山房發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.182(522)- 183(523)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者はかう始められる。それから國家の生成を主として支那、朝鮮に例を假りながら敘し、更に國家思想の出現に及んでゐるのであるが、著者の特に強調せられるところは日本國家思想は根本に於ては變更せしめられなかつたといふ點であり、それが著者肥後和男氏の日本國家思想史の根本的な立場である。

本書は更に進んで統一國家の成立とその思想、佛教と國家思想、封建的國家の再現と國家思想、中世の神國論、近世の國家思想、明治以後の國家思想と頁を追つて手際よく述べられてゐる。

本書にはところどころ著者らしい民俗學的な見解も見えて興味深いものがある。例へば郷社の成立が河川の水利と深い關係を有すること、即ち一筋の河水によつて灌漑の便を得る村々が集つて郷社を支持してゐる事實から古代に於る農業集團の結合が水利を機縁として行はれたであらうことに想到せられた如きその一例である。

本書はその名の示す通り、國民的教養を目指してゐるのであつて、公平なる見解を平易なる敘述を以てなせるもの、精密なる考證、斬新なる一家言を期待すべきでないのは勿論である。(四六新判本文一七一頁、定價五拾錢)(淺子勝二郎)

おらんだ正月

(森 銑三著)
(富山房發行)

徳川時代蘭學が漸く擴まり始めて、わが國にも次第に西洋の諸學が入り來つた頃のこと、さうした學問を修めて居る人々の間で太陽曆の新年を祝ふことが行はれた。云ふまでもなく、當時國內

ではまだ太陰曆のつかはれて居た時代のことである。

そしてこのことは新元會或はオランダ正月などと呼ばれて居たのであるが、本書の題名「おらんだ正月」の出所もまたこゝに存して居るといふ。本書は傍題として「日本の科學者達」といふ説明が附してある通り、日本——といつても特に徳川三百年の泰平の世に輩出して、後世に立派な業績を残した科學者等五十二人の小傳を記したもので、さうした人々を一書のうちに集めたおもむきが、恰もその昔オランダ正月を祝ひに集つた學者等の會合に似通ふからと云ふわけである。

しかし茲に本書を紹介するに當つて、豫め斷つておかねばならぬことは、之がもと／＼兒童のための讀物として書かれたものだといふ點である。即ち本書は富山房百科文庫の一冊で、殊に家庭及兒童讀物の部類に含まれるものなのである。従つて之にも新しい研究の成果を求めたり、精細なる記述を期待したりするならば、それは始めから間違ひだと云はねばなるまい。それどころかこゝに見るのは一人あたりほんの五六頁ばかりの略傳に過ぎぬ、けれどもその平易にして且つ興味多く記されたうちに、讀者はなほ著者の周到なる用意を見ることが出來よう。各篇はもちろん個々に獨立するものではあるが、而もその間の連關にも充分の注意がはらはれて居るし、その多くの圖版を載せて居ること、並びに各人毎にそれぞれ數種の参考文献を示してあることなども非常に宜い。そして更に特別一言したいと思ふのは、そこにとりあげられた人々の多くが、いづれも時代に先がけた人々の姿であることである。學者等の仕事といふものは、いつの時代にあつても、と

かく地球であるため、世間一般にはその存在が比較的華々しく
ないから、その意味でも斯うして従來の史的研究の成果を根據
に、さうした人々のことをやさしく面白く紹介するといふことは
決して徒勞でないと思ふ。しかも著者の希望によれば、更に進
んで之が多少とも讀者を裨益し、その發展のために資せらるべき
を願ふものの如くである。

筆者はさきに同じ著者の「古賀精里夫人」と題する小冊子——
それは本塾圖書館所藏の古賀家文書の一に基づいて記された小さ
な本で、僅か二十頁餘りのものでしかなかつたが、——を一見し
たときにもやはり斯うする著者の意向を感じたことがあつた。しか
しそれが本書にあつて一層著しいのは、本書のもつ性質の上から
も當然なことであるかも知れない。ともかく、今日兒童の讀物に
ついて最も議論のあるとき、この意味からも本書の意義は決して
尠なからざるものがあるであらうし、否そればかりか、興趣豊か
な讀物として大人の讀者をして必ずや、失望せしむることはあ
るまいと特に附言をしておく次第である。(本文二八六頁、圖版七
八)(會田倉吉)

Essai d'une histoire comparée des Peuples de l'Europe, par Ch-Seignobos (Paris, 1938)

シャルル・セニョーボス教授は一九三二年に Histoire sincère
de la Nation française—Essais d'une histoire de l'évolution

書評

du peuple français. (英譯 Evolution of the French People,
by Catherine Alison Phillips, New York, 1932) を出して、
多大の反響を呼び、(史學 十二卷四號 書評参照) 本國でも非常
なる歡迎を受けて最近四十數版まで重ねたが、今回は右のフラン
ス史に於ける方法を一般歐洲諸國民史に應用したもので、同様の
獨創的考察を以て貫かれてゐる。著者の方法と抱負が如何なるも
のであるかを知るために、左に序文の概略を譯述してみる。

『著者の Histoire sincère de la Nation française がフラン
スに於て歡迎を受けたことは、著者を勵まして更に大膽なる計
畫に向はしめた。自分は一卷の中に、最古の時代より現代に至る
ヨーロッパ全民族の歴史を統合すべく努めた。

歴史を研究し、教授するに費された六十年は、自分をして、そ
の間に、ヨーロッパの全民族を、その歴史の全時期に於て比較す
る機會を與へた。その比較は、一國或は一時期の研究を専門とな
す史家には知られざる、彼等の生活の共通の特色を認めしめた。
それには類似してはゐるが、獨立の事情より起こつたものと、一
民族の創造になるものより模倣せるものとの區別がある。

こゝに比較せんとしたるものは、特殊史の主題たるべき、住民
の諸種の生活状態であつて、自分は、それらが如何にして變化し
て來たかを、二種の異なる變化の原因、即ち、獨立の諸事實の同
時的統合(例へば戦争、侵入、革命など)と、先在の諸事情より秩
序に従つて由來せるもの(權力の發展、技術の進歩、宗教、制度
の傳播など)とを區別しつつ、説明せんと努めた。これらすべて
の變化は、人の行爲の所産である。しかし行爲そのものは、人々